

情報提供による副作用の防止等について

一般用であっても医薬品には、健康を維持し、あるいは病気を治す効果を有する一方で、健康を害する様々な副作用が生じうる。また、体質、薬の飲み合わせ、薬の飲み方等により、副作用が生じる可能性が高まることがある。

次のような事例においては、一般用医薬品の購入時に十分な情報提供をすることにより、副作用の発生を防止できた可能性があると考えられる。なお、平成14年度の一般用医薬品の副作用報告は265件あり、うち30件程度は副作用の発生を予防できた可能性のある症例である。

1. 過量投与・長期連用により発生した副作用

40代 男性 かぜ薬による肝機能障害、体重減少

| | |
|---------|---|
| 服用開始 | 頭痛やイライラ解消のためかぜ薬を常用。 服用量も1回5錠→10錠→15錠と増加していく。 1日最大、200錠を服用することもあり。 |
| 服用開始2年後 | 全身倦怠感にて医療機関受診。肝機能障害 |
| 服用開始6年後 | 体重減少発現 |
| 服用開始7年後 | かぜ薬服用中止。肝機能障害、改善へ |

2. 併用禁止薬との併用により発生した副作用

50代 男性 かぜ薬等による間質性肺炎 [かぜ薬の服用時、かぜ薬・解熱等は併用禁忌]

| | |
|-----------|---------------------------------|
| 服用開始 | 発熱により、風邪薬2種類と解熱鎮痛剤1種類を不定期に服用開始。 |
| 服用開始19日目 | 咳、呼吸困難が悪化し、医療機関へ。 |
| 服用開始20日目 | 間質性肺炎と診断。入院加療となる。 |
| 服用開始約2ヶ月後 | 症状軽快し、他施設へ転院。 |

3. 投与禁忌等の患者に投与して発生した副作用

20代 女性 解熱鎮痛剤によるアナフィラキシーショック [本剤によるアレルギー歴は禁忌]

| | |
|----------|-----------------------------|
| 副作用歴 | 解熱鎮痛剤による蕁麻疹 |
| 服用開始 | 月経困難症のため、解熱鎮痛剤を服用開始。 |
| 服用開始10分後 | 全身発赤、呼吸困難などのショック症状出現し、医療機関へ |
| 服用開始1日目 | 治療の後、軽快退院となる。 |

5ヶ月 女児 かぜ薬による授乳児の発赤 [授乳婦は薬剤師等に相談すること]

| | |
|---------|---|
| 服用開始 | 母親が風邪症状にて、かぜ薬を服用開始。 患児は完全母乳のため、数時間毎に母乳を飲んでいく |
| 服用開始3日目 | 患児に発赤出現。 |
| 服用開始4日目 | かぜ薬の服用を中止し、医療機関A受診。 |
| 服用開始5日目 | 医療機関Aは、SJSを疑い医療機関Bへ紹介。 |
| 服用開始6日目 | 治療の後、軽快退院となる。 |